書評

森田敦郎．『野生のエンジニアリング――タイ中小工業における人とモノの人類学』京都：世界思想社，2012, 280p.

著者が冒頭で「本書は，第二次世界大戦後に発展してきたタイ独自の機械技術と，それにかかわる人々とモノたちについての民族誌である」（p. 1）としているとおり，本書はタイの地場工業について，人類学の立場より書かれたものである。本書は国の工業化や集積研究を行うもの，製作現場に関わるものにとって，非常に興味深い書である。フィールドであるタイの工場現場に深く入り込み，非常に興味深い観察を行っている。その記述は活き活きとしており，読み進むうち，現場の状況を追体験している感覚になった。

本書の主題は，タイの地場工業の特徴と成り立ち，そしてそれを取り巻く人とモノとの生成的な関係の解明である。現代日本のものづくりのスキーマ（知識・認知を構成するモジュール）が構築された視点からは，一見，タイの地場工業は奇妙に見える。設計図を用いることなく，まるで直感と発想で行っているようなものづくりを，著者は「野生のエンジニアリング」と称し，その解明に取り組んでいる。結論を私なりに解釈すると，近代機械文化が未発達な状況に，日本など先進国の機械が持ち込まれ，その適応・融合過程で様々な学習（利用学習――ユーザーによる利用経験からもたらされる学習，製造学習――製造経験の蓄積を通じて行われる学習，操業実践――製作現場での試行錯誤など）が行われ，現在の状況が培われていったと理解した。

私が本書をはじめて手にした時，そのタイトルに非常に気を惹かれた。野生のエンジニアリング，いったい何が野生なのだろうと。本書を読み進めてみて，このタイトルはぴったりだと思った。

本書から感じたタイの職人達の姿は，まさに野生の荒々しさをもっていた。おそらく古代メソポタミアのエンジニア達もそうだったろう。産業革命時のイギリスでもそうだったろう。工業化初期の欧州，米国でもそうだったろう。近代化の道をたどりはじめた頃の日本もそうだったろう。そして現代日本で私が出会った職人達もそうした共通点を多く持っていた。経験と五感をフルに活かし，目的実現のために試行錯誤し，奮闘する職人達。現場での実践学習を通じて，カン・コツ・ノウハウを蓄積していくその姿。そこに必要とされるのは，教科書的な理論だけでなく，大胆な野生の発想力と，体に蓄積した感覚・経験が重要なのである。本書はそうした生の職人達の姿が見事に描き出されている。

やや違和感を覚えた点は，私と著者との技術に関する感覚の違いである。誤解かもしれないが，文脈から著者は暗黙的に「先進国の機械技術」を一つの完成形として一元化していると感じた（例えばp. 18）。私の感覚では完成された技術は存在せず，技術自体が多様でフレキシブルなものであると考えている。求められる目的（＝需要）に対応するために試行錯誤が繰り返され，複数の技術が融合したり，別の技術が転用されたりしつつ，多様な方向に技術は形を変えていく。そしてあるとき優位性を持っていた「技術」も，フェーズシフトやパラダイム転換によってあっさり，その優位性を失う。その大きな要因が，とりまく環境，状況，需要などである。それらを考慮した際，私にはタイ職人たちの行動が違和感なく感じられたのである。直感ではあるが，タイの技術者が日本の技術を受け入れないのは，彼ら自身の生活と経験がその必要性を感じていないし，自分とは無縁のものだと思っているだけではないのかということである。

日本人技術者の意図が地場技術者にうまく伝わらず，受け入れられないことは，タイ，ベトナム，インド，インドネシアなどで多々見てきた。日本人は国内ではスキーマの違いに直面することが少ないためか，異文化への価値観の伝授を苦手とすることも多い。私が訪問したインドのある工場で，欧米の技術コンサルタントが教えた内容が素晴らしいと評判になった。現地技術者達は深く得心し，そうしなければならないと意欲があがったという。しかし，そこに出入りしていた日本人は嘆いた。素晴らしいとされた内容は，じつは日本人技術者

らが常日頃から指摘していたことだったのである。しかし日本人技術者による伝達は理解されず，熱心に取り入れられなかった。

タイの技術移転の現場に立ち会っていないので，どのようなニュアンスであったのかわからない。指導する方は熱心に熱意を持って指導しようとしていたと思う。しかし，うまくいかなかったのであれば，何らかの合理的理由があったはずである。受け手が本心から必要性を感じなかったり，あるいは無理であるため自分なりの方法でやろうとしたりしたこともあったのかもしれない。そう思いながら読み進めていくと，著者が，タイ人職人の目指す方向や需要と彼らの合理性に反するからとの意見に到達した（p.171）。まさに共感した段落である。

また著者は文中で何度も図面問題を指摘していた（例えばp.195）。これも必要性と習得努力を勘案した際，受け手が合理的に考えて，それを習得する熱意を持てなかったのではないかと感じた。図面は言語にたとえるとわかりやすい。新しい言語習得には根気と努力と時間が必要である。その習得を支えるのが熱意である。それ無しでは新たな言語習得はままならない。もちろん現代エンジニアリングに図面は重要な役割を果たす。図面は設計者のアイデアを実現するための「夢」の計画書である。計画書を書くことによって，発想に無理はないのか，何が必要なのか，考えただけではわからなかった問題はないのか，などが明らかになってくる。また「図面」という技術者達の書き言葉，「共通言語」なしでは，設計者の発想と意図は正確に伝わらない。製品メカニズムが精巧になればなるほど，複雑な意図の伝達が必要となる。そうした時，図面無しでは様々な支障をきたす。共通言語を持たず，複雑な概念を伝達することは非常に難しいのである。

しかし図面無しでも，ある一つの完成品はつくりあげることは出来る。随所に1mm以下の正確さを求めなければ，再現することも可能である。さらに世界の工業発展段階の違いと，著者が指摘しているようなグローバル流通の進展により（pp.119–123），図面無しで作成することが困難な動力機関，機構などは実物が存在する。そのため，それらをうまく組み合わせ，調整することで，本来図面無しでは製作出来ない製品も作り上げることが可能になる。もちろん当初の設計性能よりは格段に劣るかもしれない。しかし需要側のニーズを満たす限り，それで十分なのである。

ただしそうした方法では，今後の発展に限界があるのも事実である。自らによる緻密で精巧な製品設計は難しいであろう。また，外資企業に代表される近代的大量生産型企業からの受注も難しいであろう。ひょっとすると学齢期に工学教育を受けた二代目以降が担っていくことになるのかもしれないと感じた。

さて，雑感はこれくらいにして，本書の構成と内容を紹介していきたい。本書は三部構成となっている。第一部で主題の理論的考察に必要な学術的骨組みを構築している。第二部はフィールド調査により，地場工場の職場や職人達を「紙上に複製」（p.32）し，その登場人物達の関心の方向性，視点の方向性，動機付け，などを丹念に紡ぎ出そうとしている。そして第三部で野生のエンジニアリングの成立と含意について深く考察を行っている。

第一部の「機械の人類学」では，1章で人類学と技術の接点，そして著者の本書執筆への動機が記されている。また，本書で展開する議論の枠組みを導入している。2章で，なぜタイの地場工業に関心を持つようになったのかを述べている。

1章の冒頭で，著者は第二次世界大戦後の人類学における技術の関心について3つの点で整理している。すなわち，生業活動と環境との関係，クラフトや手工業生産への関心，工場と社会変化である。そしてこれらが不十分であったと著者は2つの点で批判的に主張する。第一が機械や技術に関する議論の浅薄さであり，第二が近代的技術と伝統的技術を分断してとらえているとの点である。そこで著者はプルーラリズム，モースの技術論，ストラザーンによるモース技術論の拡張とオーサーシップ，パースペクティブ論へと論を展開する。そして著者は本書で，人と機械とのより密接な関連性，先進国技術と地場技術の融合を，人の知覚を通じて分析しようと試みることになる。

2章では，著者が主なフィールドとしたタイ東

北部のナコンラチャシマー（通称コラート）へと読者を誘う。バンコクからコラートまでの風景が活き活きと描かれている。そして，タイの近代工業の発展史へと筆は進む。まずタイの近代工業が19世紀末から主に広東人機械工の手工業を母体として内発的に発展したことを述べる。次に，第二次世界大戦後にサリット政権下でタイの外資導入と自由化を軸とした工業化が進められ，外資と地場工業の二重構造化が進んだことを説明する。更に1997年のアジア経済通貨危機による裾野産業への関心の高まりと地場中小工業への再評価，そして日本政府の裾野産業支援の経緯を説明している。そしてODA（政府開発援助）などによる裾野産業支援で，技術移転がうまくいかないことを述べている。

第二部は，フィールドの紙上への複製である。技術や製造現場に興味のある読者にとって，たまらなく面白く感じるのではないだろうか。本部冒頭の3章では工場の風景が活き活きと描かれる。バンコクからコラートへの道筋，フィールドとした工場の様子，工場を取り巻く登場人物，人間関係，徒弟制度，工場の組織，分類，仕事ぶり，職工の移動，分業などが記されている。

4章で著者は職人そのものに光を当てる。彼らがどのような感覚で仕事を行っているのかをとらえようとしている。そこに紡ぎ出されているのは，まさに万国共通の現場の職人の仕事ぶりである。音，振動，手応え，触覚，推論など，人に備わった様々な感覚を総動員したエンジニア達がそこにいる。

5章では，倣い溶断機の仕事ぶり，段取り，工場配置，部品や機械の調達，アウトソーシングなどが描かれている。それを著者のもつ学問体系に当てはめる努力がなされている。

6章では，職人の技能の習得プロセスに焦点が当てられる。機械いじりが好きな少年が独学で技術を学んだ事例，地場工場の徒弟の中で技術を学んだ事例，経験に基づくチャレンジ，職場のヒエラルキー，親方による職人の技能評価などが語られる。

7章では，地場工業の職人達の渡りと技術遍歴について述べている。職人達の人生と技術獲得過程が非常に興味深い。

第二部では，議論の枠組みを導入した第一部をベースとして，フィールド調査に基づくファクトから工学的な事象が抽象化され，整理され，著者の学問体系に落とし込まれていく。そして考察の第三部へと至る。

本書は興味深い多様性を持った書である。著者と同じ専門性を有する読者は，工学的なものから哲学的なものへの変換，議論を楽しむことができるだろう。一方，そうでない読者は，タイの地場工場の様子を楽しめばよい。ひょっとすると工学系の専門性をもつ読者は違和感を覚えるかもしれない。当たり前のことを当たり前に行っていることが，特別視され，哲学的に抽象化されていくからである。しかし，人類学とはそうした学問なのだと思う。フィールドの人たちが意識することなく当然と思っていることを，研究者達の共通言語にとらえなおし，一般化あるいは類型化していくのである。なじめない部分は読み飛ばせばよいと思う。

いずれにせよフィールドからの著者の発信は，生々しい息づかいが感じられ，血の滴るような真実味があり，迫力がある。等身大のタイの職人達をこれほど丁寧に紡ぎ出した書に出会ったことがない。興味がある方は是非手にとって読んで頂きたいと思う。

（馬場敏幸・法政大学経済学部）

須永和博.『エコツーリズムの民族誌――北タイ山地民カレンの生活世界』東京：春風社，2012, 435p.

文化人類学を教える大学教員として長年学生指導を続けていると，学生たちが選択する卒業論文のテーマに，時流を顕著に反映した傾向性があることに気づかされる。様々なテーマが一定期間判を押したように繰り返し現れてはいつの間にか姿を消していくが，そうしたなかでも色褪せることなく幾度となく選ばれ続けるものがある。「環境」と「観光」である。そこには，近年とみに社会還元性を持ったテーマを志向するようになった学生